おもひの木プロジェクト
活動報告書
（201703～201803）



福島県立新地高等学校

目　次

発刊にあたり　・・・ 3

私たちの想い　・・・ 3

活動実績　・・・ 3

新地町大津波伝承について　・・・ 6

おもひの木ポストについて　・・・ 8

生徒会の想い　・・・10

「おもひの木プロジェクト」へのご寄付のお願い　・・・11

メディア掲載　・・・11

「おもひの木プロジェクト」コーナー　・・・11

発刊にあたり

東日本大震災から7年が経過し、ライフラインの復旧などにより平常の生活が営まれるようになった一方、家族や大切な方々を失った悲しみは時が過ぎようとも癒えることはないと思います。本校では昨年3月11日、中庭に「おもひの木」（沙羅の木）を植樹し、震災の教訓を後世に伝えようと「おもひの木プロジェクト」を立ち上げ、「命の教育」に力を注いでおります。主な活動内容は、津波の歴史調査や実態調査、月命日の追悼行事、語り部活動等で、生徒会役員を中心に積極的に活動を行っております。最終目標は、被災３県の高校生が活動を通じて繋がり、それぞれの地域で減災意識が高まればと期待しております。今後とも、生徒たちの活動を注意深く見守って頂ければ幸いです。

福島県立新地高等学校長　江尻　雅彦

私たちの想い

福島県立新地高等学校では、2011年に発生した東日本大震災にて、在校生1名、その10日前に卒業式を終えた卒業生8名が津波の犠牲となりました。

私たちは、震災で亡くなられた多くの方々を追悼するため、2017年3月11日（土）に「偲ぶ会　東日本大震災追悼・祈念植樹式」を行い、本校の中庭に沙羅の木を植え、「おもひの木」と名付けました。私たちは、震災からの教訓を学び、災害から大切な命を守ることを目的に、被災地の高校生たちが繋がることで、震災を知らない後世へと伝えていくことを目指しています。



活動実績



2017年3月11日「おもひの木」植樹式を実施しました。校内の中庭にご遺族やその恩師、同級生、同窓会会員、教職員が参列して式を執り行いました。式では黙祷後、学校長、同窓会副会長、生徒会長があいさつし、植樹した木と説明板について解説しました。そして、沙羅の木の前に犠牲となった生徒のため9本のろうそくを灯し、献花しました。

また、3月以降、月命日のたびに、おもひの木への黙祷を捧げる活動と地域清掃を続けています。



7月3日　宮城県山元町へ聞き取り調査のため訪問しました。山元町は宮城県の海沿いの町であり、震災で多くの人々が犠牲となりました。山元町磯地区長を始め、地域住民４名の方々から震災当時のお話を伺い、震災から命を守るためにするべき行動についてご教授いただきました。

8月5日　「第７回やるしかねぇべ祭」イベントに、おもひの木の活動紹介ブースを出展しました。

新地町内外の方々におもひの木プロジェクトの活動を知っていただくため、プロジェクトの趣旨やこれまでの活動内容の紹介など、様々な方々に紹介する良い機会となりました。多くの方々から応援のお言葉やご支援をいただき、活動の幅を広げることができました。





11月4日　新地町文化祭、11月12日新地町復興産業祭におもひの木プロジェクトの活動についてプレゼン発表をしました。また、新地高校美術部が製作した「おもひの木」エコバックを販売しました。



「おもひの木エコバック」



11月18日　奈良大学で行われた「全国高校生歴史フォーラム」において、おもひの木プロジェクト地理歴史班による「新地町に残る大津波の伝承の研究」が、学長賞を受賞しました。新地町には過去に7回、大津波があったようですが、伝承が残っておらず、多くの町民は津波が来ることを想定していませんでした。その原因を調査・分析し、現在と後世の人々の命を守る取り組みを提案しました。



12月27日　いわき海星高校と生徒会活動交流を行いました。いわき海星高校は、震災当時、在校生2名が津波の犠牲となり、校舎も被害を受けました。亡くなった友人のために、じゃんがら念仏踊りを届けたいとの想いから、「チームじゃんがら」が結成されました。交流のなかでは、亡くなった生徒への鎮魂のじゃんがら念仏踊りを披露していただいたり、両校の活動紹介を行いました。短い時間でしたが、震災への想いを伝え合うことができました。

2018年1月9-10日 生徒16名で東日本大震災の被害にあった宮城県沿岸部を訪問しました。

9日は、南三陸町にあるポータルセンターに震災当時の記録を見学、旧防災庁舎献花台において黙祷を捧げてきました。また、南三陸町にある宮城県志津川高校では高校間交流を行いました。校内に震災資料室が設置されており、震災当時の様子や、これまでの活動の記録などが数多く展示されていました。志津川高校の生徒の皆さんと、「（震災からの）風化とは何か」「高校生だからこそできることは」ということをテーマに、グループディスカッションを行いました。





10日は、石巻市で語り部活動を行っている元小学校の教頭先生から地震発生時の話を伺い、命を守るために後世へ語り継ぐことの大切さを学びました。また、津波伝承ＡＲ（拡張現実）アプリを活用し、石巻市内のまち歩きをしながら、震災直後と現在の石巻市内の様子を比較することで、震災を風化させないための取り組みを知ることができました。

＊生徒の感想より（一部抜粋）＊

今回の研修では、志津川高校生とのディスカッションを通じて互いの意見を出し合い、同じ課題に取り組むことができました。その後、新地高校ではこれからどのような活動を行うのか、何が必要なのか、周囲の人に知ってもらうためにはどうすれば良いかなどを、自分達で話し合うことができました。

私たちの活動も、様々な人の目に触れられるように、活動レポートを作成していきたいと思います。また、学校内の活動としては、東日本大震災のことだけでなく、日本の自然災害についての学びを深める時間を増やしていきたいと思います。日本は自然災害の多い国です。だからこそ知識を身に付け、生き抜いていく力を身に付けていこうと考えました。

新地町大津波伝承について

新地町では、過去6000年間に7回、大津波が発生しています。
貞観地震（869年）の大津波や、慶長奥州地震（1611年）の大津波で多くの被害があったにも関わらず、震災前の新地町では「この町に大津波は来ない」と信じられていました。なぜ、歴史が正しく伝わらなかったのでしょうか？

新地町の地名に大津波伝承が残っていました。

①地蔵森
　海岸で祀られていたお地蔵さまが、貞観地震（869年）の大津波で舟輪沢地区まで流された。その後、村人により山頂へ運ばれ、地蔵森という地名ができた。震災を語り継ぐ上で大切な山である。

②小鯨
　大津波のときに、明地地区近くの小鯨まで鯨がきた。

③八千山
　過去の大津波のとき、作田の山に登り、八千人（大勢）の人が助かったことに由来。
　震災前、八千山の大津波伝承は否定されていた。八千山は現在は切り崩され、地図から地名も消滅。このままでは、伝承が途絶えてしまう可能性がある。



震災と神社の関連性についても調べました。

①津（つのみの）神社
　1697年に建立され、「ここまで逃げれば津波にあわない」と伝わる。
　1611年に発生した慶長奥州地震の、津波が到達した高さを語り継いだ可能性がある。



②鹿狼神社
　新地町のシンボルである鹿狼山の山頂にある鹿狼神社は、貞観地震(869年)の18年後に建立された。
　製鉄工場で栄えた新地町にあった村は、ほぼ消滅した。



③塩釜神社
　慶長奥州地震（1611年）の大津波で海に沈み、再建された可能性がある。チリ地震（1960年）の引き波の時に、海底の塩釜神社跡が姿を現した。
　「津波の引き波の後に避難すれば大丈夫」この誤った言い伝えを信じた住民がおり、町史に、住民が海底を歩き、魚を捕り、神社跡を見学したという記録が残る。津波への危機感や切迫感が無かったことがうかがえる。

近年、新地町に大津波は来ないと信じられていました。

その理由は、

①数百年に一度しか、大津波が来なかったため。五十年に一度の三陸地域とは異なり、大津波伝承（歴史）は残ったけれど、信じられていませんでした。

②津波が到達した高さが伝わっていませんでした。八千山が切り崩され、伝承も否定されていました。

③チリ地震（１９６０年）時、犠牲者がいなかったため、危機感はほとんどありませんでした。

④津波で大切な人を亡くした方は、当時の辛い経験を話すことは難しい、という方もいらっしゃる。

だからこそ、私たちのように震災で生きのび、歴史を伝えられる者の語り部活動が必要だと考えます。

生きのびた私たちが出来ること

現在、新地町には津波の高さを伝えるものがありません。後世の人達へ伝えるため、石碑を建てることを目指していきたいです。

新地町大津波伝承についての研究に関する活動経緯・参加した生徒の感想

11月 4日　新地町文化協会主催「新地町文化祭」にて研究発表
11月18日　奈良大学・奈良県主催の「全国高校生歴史フォーラム」にて学長賞受賞
12月15日　相馬市在住の郷土研究家の方へ研究発表
12月27日　福島県立いわき海星高校との生徒交流の一環にて研究発表
1月 9日　宮城県志津川高校との生徒交流の一環にて研究発表
1月15日　新地町立新地小学校の全校生徒にむけて研究発表

過去の災害の歴史は、人づてに伝わっていくことで、間違った内容へと解釈され、被害が繰り返されたことを知りました。命に関わることだからこそ、知らなかったではすまされないと思います。人間はすぐ忘れる生き物だからこそ、過去の教訓に学び、震災の記憶も石碑や文章など形あるものに残すことを通して、次の世代へと伝えていきたいです。そのためにも、他人事にせず、まずは関心をもってもらいたいと思います。

3年B組　高橋　みき



これまであまり自分の経験を話す機会がなかったので、伝える難しさを感じましたが、発表してみたら、自分達がやっている語り部の活動は、震災を経験していない人たちへ伝える意義があることだと感じました。次に震災が起きたとき、後世の人たちが命を守れるように、震災の教訓を石碑に残すことで伝えていきたいです。

1年A組　武澤　愛華

震災の経験は、記録として残っても、年月が経つと人の記憶からは薄れてしまいます。この震災で亡くなった人への慰霊碑と経験を継承するための継承碑を残せたらと思います。この大切な活動を次の世代が忘れないよう、後輩に伝えていきたいです。

1年B組　小賀坂　美咲

おもひの木ポストについて

2017年3月11日新地高校内に「おもひの木ポスト」を設置し、震災への想いを募る活動をはじめました。震災を体験された方の体験談や震災への想いはもちろん、震災を体験されていない方からも、たくさんの応援メッセージを頂きました。

震災への想いは、人それぞれです。この想いを後世に残すことで、震災の記憶の風化を防ぎ、次の災害に対する教訓へと繋げていくことを目指しています。新地高校は、引き続き震災への想いを綴った「手紙」を、おもひの木ポストにて受け付けています。後世へ伝え残したい想いや、震災についての様々な想いを手紙にして頂き、新地高校までお送りください。お手紙は本校ホームページや冊子等で公開させて頂く予定です。何卒ご協力の程、よろしくお願い致します。（なお、個人情報の保護、送り主様の御意向は最優先致します。）

萬古流芳
意味：永遠に名声を伝える。
相馬市在住　志賀　正

あの大震災から6年が経ち、多くの方々が尊い命を落としました。本当に悲しい出来事です。当時小学四年生だった孫も今年新地高に入学して大変お世話になっております。

子どもから大人まで、これからやりたいことや夢や目標に向かって歩いている矢先に、そう思うとご家族の胸の内はどんなんだっただろうと心が痛みました。知人や友人、私のお客さまから大切な人を亡くした無念さを聞かされる度に、とても他人ごとではないと一緒に涙して励まし合いました。震災と同時に、甚大な被害を受けた原発事故で家族バラバラに避難されてとてもつらい思いをした人もたくさんいると思います。一言では言い表せない深い悲しみを重く受け止めなくてはなりません。今生かされている私達に何が出来るのか考えて、一歩一歩始めて、少しでも恩返しが出来れば犠牲になられた方々への供養になると心から信じております。新地高校生の皆さまへ今やれること、そして忘れてはならない大切なことを次世代に受け継いでいってほしいと、そしてこの素晴らしい発案を全国へ発信して下さいますよう心から祈っています。

理容師　今野　純子

＊おもひの木ポストへ寄せられた想い＊

東日本大震災で津波にのみ込まれた同級生を悼む

この度の東日本大震災で、大熊町在住の高校同級生が4歳の孫さんと共に津波にさらわれ、命を亡くしたことを避難先の新聞で知りました。自宅が大熊町の海の近くにあり、原発にも近いことから津波と原発の両方で安否を気遣っておりました。まことに痛ましく残念でなりません。

彼とは高校3年間クラスが一緒でした。よく家に遊びに行き、近くの海沿いで遊んでいました。卒業後はお互い大学に行き、離れ離れになってしまいましたが、大学時代に仙台の七夕祭りをご案内したことを覚えています。

私が退職して、地元の図書館に勤めていた時に、久しぶりでお会いしました。元気そうな様子に懐かしさが込み上げてきました。

大震災の前の年に、同級会を開催した折、久しぶりに出席してくれ、飲み、歌い、語り、楽しんでいた様子を今でも忘れることが出来ません。二次会の最後に声高らかに校歌を歌い、またの再会を約束したのに。あの時が最後の姿になろうとは誰が想像出来たでしょうか。まだ信じ難く、現実を受けとめることが出来ません。本当に残念です。今はただただご冥福をお祈りするばかりです。安らかにお眠りください。

いわき市在住　新谷　孝明

天国の瑞姫へ

のどかな田園風景、緑に囲まれた新地高校が好きだと自ら学校を選び入学した貴女は、勉強、部活動を頑張りましたね。充実した3年間を過ごしたと思います。

3月1日に卒業式、そして3日には貴女の誕生日、その時貴女は、「私、新地高で良かった」と言っていたのをつい昨日のように思い出されます。きっと先生方、同級生に恵まれていたことでの感謝の気持ちだったのでしょう。

昨年秋、創立110周年を迎えました。今年の3月11日、貴女達を忘れないようにと「おもひの木」沙羅の木を植樹して頂きました。ばあちゃん、嬉しくて感動して涙が止まりませんでした。貴女が選んだ学校、やはり素晴らしい学校です。天国からいつまでも新地高校、後輩達を見守っていて下さい。

ばあちゃんより

津波がもたらしたものは、私が知識として得ている現象では言い尽くせないものでした。余震の恐怖とともに、それまで経験したことのない大きな戸惑いの塊となって襲ってきました。家の再建はどうしよう、家族をどこに住ませよう、ガソリンがなくてどうやって職場に行こう、食べ物をどうしたらいいのだろう、こんなことは自分の規格には全くなく、避難所の指揮をとっている夫は帰宅できず、とにかく自分の気持ちを奮い立たせるのが精一杯でした。食べる物もなく世の中が心配や不安の中で、助けてくれたのは、やはり人の「情」です。人の奥底にある温かいものが救いになり、そこで救われた人がまた他の人を救えたように感じます。教科書にないことを自分はいつどれだけできるか今後の人生で仰ていきたいと思います。

江尻　彰子

平成29年3月11日、あれから6年。新地高校に「おもひの木」を植えて頂きました。この日からさかのぼること約1か月前、この植樹の案内をご遺族の方々にお電話することになりました。この係を快く引き受けたものの、一軒一軒お電話するごとに、当時の辛い気持ちが沸々と湧き上がってくるのを感じました。もう6年も経っているのに、あの日のまま時が止まっているようにも思えたし、ご遺族の方々から「一歩前に進もうとしているのに…。」という思いも伝わってきました。今さら新地高校へ来て頂けるだろうか。来て頂いていいのだろうか。そんな不安が日々募っていきました。

しかし、植樹当日は9人全員のご遺族の方々が、家族ぐるみで来校してくださいました。また、当時の職員の方々もたくさん来てくださいました。その姿を見ただけで私は涙が止まりませんでした。

そして、ご遺族の方々から、「おもひの木を植樹してくれてありがとう。」という感謝の気持ちと、「わが子がこの新地高校に元気に通っていたことを、忘れないでほしい。」という言葉を頂きました。この言葉は、私に「この子たちが新地高校で活躍してきたことを、みんなに伝えたい！」という思いを抱かせてくれました。

9人それぞれにたくさんの思い出があります。悲しい気持ちも決して消えることもなく、未だに複雑な気持ちです。私はこの6年間、あまり思い出を語らず、新地高生に寄り添うことで、生きることの大切さを伝えていこうと思っていました。しかし今は、やはり言葉でこの子たちの存在を伝えたいと思いはじめています。まだまだこの子たちの思い出を言葉にする迷いはありますが、多くの方々からもたくさんの思い出を、彼ら彼女らの勇気を、この「おもひの木」へ寄せてほしいと願っています。その思い出をみんなで共有することで、彼ら彼女らから勇気をもらえる気がします。私も次回は勇気をだして思い出を語ろうと思います。

旧職員　髙野　由起子

生徒会の想い



前生徒会長
島　美咲

私が生徒会長になると同時に始まったおもひの木プロジェクトも、もう1年が経ちました。東日本大震災から7年が過ぎようとしても忘れられない記憶があります。小学5年生だった当時は、街が津波に飲まれていく様子をただ見ているだけでした。また、仲の良かった友達を津波で失い、何もできない非力な自分がいるという現実に直面し心苦しかったことを覚えています。

高校に進学し、生徒会長になってからは、小・中学生の頃にはできなかった震災復興に関わる活動をしたいと考えました。そのため語り部活動を行ったり、他の地域の被災した街を訪ねたり、様々な活動を通して県内外の生徒と交流したりするなど積極的に活動を行いました。振り返ってみると、語り部活動では思うように伝えられなかったり、被災地訪問の際に話を聞いたりしているときに涙を流す時がありました。しかし活動を通して学んできたことは全て私にとって大切な出来事で成長することができました。おもひの木プロジェクトに関わって下さった方々、本当にありがとうございました。



生徒会長
佐藤　真都香

おもひの木プロジェクトは、様々な活動をしています。月命日に実施している月例会では、新地町や本校で亡くなった先輩方へろうそくの火と共に黙祷を捧げています。また、震災後復興しつつある新地駅前から地下道を清掃する活動も続けています。他の高校との交流活動も行っていて、被災した地域の被害についてや復興状況、お互いの活動を報告し合っています。

その一方で、活動に対して興味、関心の低い生徒、どんな風に関わっていけばよいのか分からない生徒がいるのが現状です。私たちはこれを改善していくために、月例会の前に放送を流したり、おもひの木プロジェクトについて活動を紹介する新聞を作るなどの意見が挙がっています。一部の生徒だけでなく、生徒全員がこの活動に関わっていってもらいたいです。私たちより下の世代になってくると震災についての記憶がない人たちが増えてきてしまいます。震災は辛い体験でしたが、私たちが震災について考え、活動を広めていくことが、次の災害で同じ被害を繰り返さないために大切なのではないかと思っています。

「おもひの木プロジェクト」へのご寄付のお願い

本プロジェクトは、様々なご支援やご寄付を頂き、活動を継続しております。本プロジェクトの理念に賛同していただけた皆様には、ぜひご寄付を通じて私たちの活動をサポートいただければ幸いです。集まった寄付金は「おもひの木プロジェクト」の活動資金として、おもにプロジェクトの運営費（生徒達の旅費・宿泊費、備品購入等）に使用させていただきます。どうぞご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

＜ご寄付先＞
相双五城信用組合　新地支店　普通1037720
新地高校生徒会おもひの木教育振興基金

メディア掲載

新聞：　朝日新聞・河北新報・奈良新聞・日経新聞・福島民報・福島民友
テレビ：　テレビユー福島・ＮＨＫ・福島中央テレビ・福島放送
ラジオ：　ラジオ福島

等、多数取り上げて頂きました。

「おもひの木プロジェクト」コーナー



校内の職員玄関ホールには、「おもひの木プロジェクト」コーナーを設置し、これまで交流してきた高校生からや新地町内での様々なイベントでの出展の際に多くの方々からいただいた一言メッセージをおもひの木の「葉」になぞらえて提示しています。



2018年3月　発行
編集・発行　福島県立新地高等学校
〒979-2703　福島県相馬郡新地町小川貝塚西13-1
TEL 0244-62-2009 ／FAX 0244-62-5021
http://www.shinchi-h.fks.ed.jp/